

## 説一切有部の縁起説 ——舟橋一哉説の検討——

本 庄 良 文

### §1. はじめに

原始仏教および『俱舍論』を中心とするアビダルマ仏教について顕著な業績を挙げている舟橋一哉は、1983 年、『佛教學セミナー』（大谷大学佛教学会）第 37 号に「一切法因縁生の縁起」をめぐって」という論文を発表した。舟橋の論文をまとめてみれば、およそ次のようになるであろうか。

- (1) 原始仏教の縁起説には「有情数縁起」と「一切法因縁生の縁起」という両側面があった。前者は、「有情が迷いの世界に流転する、その流転の姿を説く縁起説」であり、後者は「迷いの生にあっては、すべては種々様々な条件によって条件づけられて存在するもの、即ち条件に依存するものばかりであって、条件を離れて、条件と無関係に存在するものは一つもない」ということである。
- (2) ところが『俱舍論』を代表とする有部系アビダルマ論書の縁起説はもっぱら「有情数縁起」となり、「一切法因縁生の縁起」は、ただ六因・四縁・五果<sup>1)</sup>の解説において、「縁起」という言葉を使わずに（概念としてのみ）説かれることとなった。
- (3) アビダルマ仏教において一度は切り捨てられたこの「一切法因縁生の縁起」は龍樹によって復活させられた。
- (4) この、龍樹による原始仏教説の復活は仏教思想史上、画期的なできごとであった。

壮大な視野をもった仏教学者にしてはじめて展開できる論であり、舟橋が自らの業績を龍樹のそれにとえて率直な自負の念を開陳するのも当然といえよう。ただ、私はこのうち、(1) についてはその当否を論ずる用意も資格もないのであるが、(2) については検討の余地があると思う。つまり、少なくとも『俱舍論』を手がかりにして有部系アビダルマ論書（補注）を読むかぎり、有部正統派における縁起説は、舟橋のいうような、また、仏教学者の大多数が思うような、「有情数縁起」ではなく、まさしく「一切法因縁生の縁起」（より正確には「一切有為法因縁生の縁起」）<sup>2)</sup> と考えるべきではないか、と思うのである。もしそうだとすれば、

(3) (4) にいう龍樹の説も、有部アビダルマの縁起説の前提の上に立っていると、いってもよく、したがって、決して原始仏教思想の「復活」とは言えないのである。

## §2. 『大毘婆抄論』における経・律・論

この問題を検討するためには、まず有部正統派における経・律・論の地位を確認しておく必要がある。かつて論じたごとく、<sup>3)</sup> 有部正統派の教学を確定することとなった『大毘婆抄論』の冒頭には、経・律・論 (アビダルマ) の地位についておよそ次のように述べられている箇所がある。<sup>4)</sup>

- (1) 経は未だ善根を植えていない者に植えさせるため、律は、それを成熟させるため、論は善根を成熟させた者に解脱を得させるために説かれる。
- (2) 経は初心者に、律は中堅の者に、論は上級者に説かれる。
- (3) いまだ正しい教え (正法) に触れていない者に触れさせるために経を、触れた者に学習項目 (学処) を受持させるために律を、学処を受持した者をして諸存在の真実相に通じさせるために論が説かれる。

経・律・論の三蔵を、修行者の階梯に対応させると、その地位は、後のものほど高いとするのが、有部正統派の立場である。その立場からすれば、もし修行者が悟りを得るとするならば、それはアビダルマに説かれた「諸存在の真実相」を悟ってのことなのである。してみれば、いま問題の縁起説について有部の正統説を検討するにあたっては、まず論蔵の説を見なければならぬ。

このことを念頭において、次に『俱舍論』第三章 (世品) の説くところを、印度撰述の注釈を参考にしながら見ていくこととしたい<sup>5)</sup>。

## §3. 『俱舍論』の所説

### (i) 三世両重の因果<sup>6)</sup>

有情の輪廻は、過去世、現在世、未来世という三つの節があり、①無明、②行、③識、④名色、⑤六処、⑥触、⑦受、⑧愛、⑨取、⑩有、⑪生、⑫老死という十二の部分 (十二支) からなる縁起である。

過去世には最初の二支が、現在世には中央の八支が、未来世には最後の二支が配当される。(以上、第20詩節)。

①「無明」(無知)とは、過去世において煩惱が盛んであった段階(分位)をいう。②「行」は過去世において盛んに善悪の業を造った段階。③「識」は、有情が母胎に着床する瞬間であり、④「名色」はそれ以降、胎児の六つの認識器官が

できあがる前である（以上、第21詩節）。

⑤「六処」は、六つの認識器官ができあがってから、認識器官、認識対象、および認識という三者の和合の生ずる以前である。⑥「触」は三者の和合が生ずるようになって以降、苦楽の原因を分別する前の段階である。（以上、第22詩節）

⑦「受」は、苦楽の原因を分別することができても、いまだ異性を願望するに至らぬ段階。⑧「愛」は、異性や、生活を快適にする資具を願望する段階。⑨「取」は、異性や資具を願望して四方に駆け回る段階（以上、第23詩節）。

⑩「有」は、四方に駆け回る者が、来世での生存（有）をもたらす、善悪の業を造る段階。⑪「生」は、来世において母胎に着床する段階。⑫「老死」は、来世において再生してから以降、現在世でいえば「受」に至るまでに相当する段階（以上、第24詩節）。

要するに、無明を始めとする十二支のそれぞれは、無明（無知）のみ、行（動機）のみ等を指すのではなく、過去から現在へ、現在から未来へと輪廻してゆく有情（生物）の、心身を構成するすべての要素（五蘊）を指すのである。ではなぜそれらを「五蘊」と呼ばずに「無明」等と呼ぶのかといえ、それはその段階のそれぞれにおいて「無明」などが主要なものだからである（第25詩節）。

## （ii）四種の縁起

しかるに、縁起には、四種がある。刹那縁起、遠続縁起、連縛縁起、分位縁起である。（詳細省略）そのうち、先に説明した十二支分を有する縁起、すなわち「三世両重因果の縁起」<sup>7)</sup>は、第二、第四の「遠続縁起」「分位縁起」に当る（第25詩節）。

いっぽう、有部アビダルマ蔵に属する『品類論』には「縁起とは何か。一切の有為の諸存在（諸法）である。縁己生（条件によってすでに生じた）の諸存在とは何か。一切の有為の諸存在である」と説かれている。四種のうち第一、第三の「刹那縁起」「連縛縁起」がこれに当る。<sup>8)</sup>

## （iii）経に説く十二支縁起と、アビダルマに説く「一切有為法縁起」

では、縁起は、経の中では十二支分を有するものとして説かれ、アビダルマの中では「一切有為法」と説かれたことになるが、なぜこのように別様に説かれたのか、といえ、経中の説は、經典を聞く人たち（所化）の意向にあわせたものであり、アビダルマ中の説は、諸存在の相を述べたものだからである。すなわち、經典に説かれた縁起はもっぱら「有情数」であり、アビダルマ中に説かれた縁起

は「有情数」と「非有情数」との両者、すなわち、有情の輪廻にかかわる存在要素と、そうでない存在要素との両者を含むのである。<sup>9)</sup>

#### (iv) 経に有情数の縁起のみを説く理由

では、なぜ經典には、輪廻する有情に関わる(三世兩重因果の)縁起のみが説かれるのか。それは、経を聞く人たちの、「私は過去世においてだれであり、どのようなであったのか」「現在においてはどうか」「未来においてはどうか」という迷いを除去するためである。<sup>10)</sup>

### §4. 『俱舍論』所説の意義

以上、紹介したところによって『俱舍論』が祖述する有部正統派の縁起説の概略は知られるであろうが、念のために、その意味を再確認しておきたい。

有情輪廻の相貌を示すものとしての十二縁起を、有部は「三世兩重因果」と見做す。これは阿含經典の有部的解釈である。有部正統派によれば、阿含經典(經藏)には「有情数縁起」しか説かれていない。それは教化対象の意向に沿うもの、その無知を晴らすためのものである。いっぽう、アビダルマ(論藏)においては「一切有為法」とのみ説かれている。舟橋流に言えば「一切法因縁生の縁起」、私流に言えば「一切有為法因縁生の縁起」である。ひろく「有情数」および「非有情数」にわたり、諸存在の相(『大毘婆沙論』風に言えば、諸存在の「真実相」)を明す縁起説である。

さてここで、先に紹介した『大毘婆沙論』冒頭の説を想起されたい。有部正統派の縁起説として、經藏の説(「有情数縁起」と、論藏の説(「一切有為法因縁生の縁起」とでは、いずれが中心的な説であろうか。無論後者である。「一切有為法因縁生の縁起」は舟橋によって、アビダルマ仏教において「切り捨てられた」と評価されたが、すくなくとも『俱舍論』における『品類論』の引用および評価、『大毘婆沙論』での三藏の評価からすれば、むしろ実態はその逆である。

### §5. 『俱舍論』所説の問題点

ただし、『俱舍論』による有部縁起説の「祖述」にはひとつ問題がある。それは、「三世兩重因果」の縁起説も、『毘婆沙論』の説であること、つまり有部論藏の説であることである。『俱舍論』は、「論藏の縁起は、有情数・非有情数を含み、經藏の縁起は有情数のみ」とまとめているのであるが、事情はそのように単純な

のではない。論蔵の縁起説には、『品類論』の縁起説と『発智論』の縁起説との二種があり、前者が『俱舍論』において「アビダルマの縁起」と呼ばれるものに対応し、後者は経蔵の有情数縁起の有部的解釈である。つまり、有部論蔵の縁起説は統一的でないわけである。

この問題について、実は、『発智論』の大注釈書、『大毘婆沙論』によって論断がなされており、『俱舍論』がその論断に基づいて叙述を進めていることがわかるのである。結論を言えば、『大毘婆沙論』の立場からすれば『品類論』の縁起こそが、真のアビダルマの縁起であり、『発智論』の縁起はそうではない。『大毘婆沙論』<sup>11)</sup>は言う（取意）。

【問】『品類論』には「縁起法とは何か。一切の有為法である」と言う。『発智論』の説と、『品類論』の説とでは何が違うのか。

【答】前者の説は不了義であり、後者の説は了義である。…前者の説は世俗であり、後者の説は勝義である。前者の説は有情数の縁起法を説くが、後者の説は有情数・非有情数両者の縁起法を説く。

## §6. まとめ

以上、まとめてみると、

- (1) 『品類論』『発智論』『大毘婆沙論』『俱舍論』における有部の縁起説には「有情数縁起」（三世両重因果の縁起）および、「一切有為法因縁生の縁起」との二つがある。
- (2) 『俱舍論』によれば、経蔵には前者のみが説かれ、アビダルマ（『品類論』）には後者が説かれる。（アビダルマにも二説があり、婆沙論において『品類論』の説が勝義の説とされている。）
- (3) 『大毘婆沙論』の三蔵の評価からしても、有部正統派の縁起説としては、後者の方が中心的な説である。
- (4) アビダルマ仏教において「一切法因縁生の縁起」は「切り捨てられた」とする舟橋説は訂正を要する。
- (5) 上のような前提に立てば、龍樹が、原始仏教の縁起説を「復活」させたとする舟橋説も再検討を要する。

- 1) 櫻部建『俱舍論の研究』法蔵館 p. 95 以下参照。
- 2) アビダルマ仏教によれば、「一切法」のなかには不生不滅なる常住の存在（無為法）と、条件によって生じては滅する無常なる存在（有為法）とがある。縁起説はあくまで存在の生滅を説くのであるから有為法のみに関連しており、これを「無為法」にまで適

用することはできない。したがって「一切法因縁生」というわけにはいかない。

- 3) 拙稿「阿毘達磨仏説論と大乘仏説論——法性、隠没経、密意——」『印度學佛教學研究』38,1,1989, pp. (59)-(64) ; 拙稿「毘婆沙師の三蔵観と億耳アヴァダーナ」『佛教論叢』35,1991, pp. (20)-(23).
- 4) 大 27,2, a, 1-11.
- 5) 山口益・舟橋一哉『俱舍論の原典解明世間品』法蔵館 1955, p. 154 以下.
- 6) 過去世・現在世・未来世の三世にわたっており過去世の煩惱(愛)と業(行)とが原因になって現在世の苦(識ないし受)が起こり, 現在世の煩惱(愛, 取)と業(有)とが原因になって未来世の苦(生, 老死)が起こる, という二重の因果関係が認められるので「三世両重因果」の縁起と呼ばれる.
- 7) 山口・舟橋前掲書 pp. 166-171.
- 8) 山口・舟橋前掲書 p. 167f
- 9) 山口・舟橋前掲書 pp. 171-172.
- 10) 山口・舟橋前掲書 pp. 173-176.
- 11) 大正 27,117b-c. このセクションを付加することができたのは学友佐々木閑氏の教示による.

(補注) 文献としての有部「アビダルマ」は概ね広狭ふたつの意味をもつ。狭い、厳密な意味での「アビダルマ」は、六足発智, すなわち, 有部論蔵である。広い意味でのそれは、『俱舍論』や『大毘婆沙論』等の, 論蔵を母体とした, 「蔵外」文献を含めた文献群である。

#### 補説:『俱舍論』における世親の立場

『俱舍論』の説は, 第八章(定品)末尾にいうごとく, 基本的にはカシミール有部(有部正統派)の説く道理に従うものであるが, 有部内部の反対派である「経量部」に名を借りてこれに批判を加える場合も多い。

縁起についても, 第三章第 28 詩節前半が終わったあと, 有部正統派の「分位縁起」説に批判を加えている。その部分を少しく原文からの和訳によって紹介したい。

しかしここにおいて経量部の者たちは論駁する。「いったい, 以上の意見は, 気儘に述べられたのであるか, あるいは経の意味が [述べられたのであるか] と。

[有部正統派が] 答える。「経の意味が [述べられたのである] と。

[経量部がいう。——] もし経の意味が説かれた, というなら, その [君たちの説] は経の意味ではない。どのようにか。まず, 「この, 分位縁起は, 十二の, 五蘊の段階であり, 十二の支分である」と先に [君たちによって] 説かれたが, これは經典に反する。経には別様に説かれているからである。「無明とは何か。前際(過去世)にたいする無知である」云々と。また, 了義(その意味がすでに解説された)の [経] は, ことさらに解説される必要はない。ゆえにこの [君たちの解釈] は経の意味ではない。

議論は暫く続くのであるが、これによっても世親（また有部正統派も）が、「三世両重因果」（分位縁起、有情数縁起）の説を、阿含經典解釈であると認めていることが解る。先に見たように、有部正統派によれば、たとえば「無明」は、無明（無知）のみを意味するのではなく、過去世において煩惱を盛んに起していた段階の、有情の身心を構成する諸要素すべて（五蘊）を表すのであるが、「經量部」（実は世親）は經典には「無明とは過去世にたいする無知である」等と解釈してあるのであるから、それをもう一度有部のように解釈しなおすことはない、というのである。

もとより經量部は「阿毘達磨は佛説ではない」とする（本論文注（10）に挙げた第一の拙稿参照）のであるから、『品類論』にあるような「一切有為法因縁生の縁起」をそのまま認めることもないであろう。『俱舍論』における世親の立場は、『発智論』に基づく有部正統派の縁起經典解釈も、『品類論』の縁起解釈も、ともに否定するものである。

〈キーワード〉 有部、アビダルマ、縁起説、俱舍論、舟橋一哉

（神戸女子大学助教授）

### 新刊紹介

杉本卓洲著

## 五戒の周辺

——イン德的生のダイナミズム——

A5判・498頁・定価9,500円  
大蔵出版・平成11年6月10日